

# 水稲時期別技術対策情報 22-5

平成22年 7月23日  
新潟県農林水産部

## 登熟期の栽培管理のポイント

- 1 栄養凋落を防止するため、第2回目の穂肥及び飽水管理により後期栄養を維持する。
- 2 病害虫の発生状況を把握して的確な防除を行う

## 【 生 育 状 況 】

7月20日現在のコシヒカリの県全体の生育は、葉数の進みは平年並、草丈は平年及び平成20年（倒伏多発生年）に比べてやや長く、茎数は平年より少ない。葉色は平年に比べてやや淡く、7月9日から7月20日にかけて急速に褪色した。

こしいぶき及びコシヒカリの幼穂形成期は、ほぼ平年並である。

### 1 7月20日現在のコシヒカリの生育（県平均値）

農業普及指導センター気象感應ほにおけるコシヒカリの生育（7月20日現在）

地 域	草 丈			茎 数			主稈葉数			葉 色		
	本年 (cm)	平年比 (%)	H20比 (%)	本年 (本/m <sup>2</sup> )	平年比 (%)	H20比 (%)	本年 (葉)	平年差	H20差	本年 (SPAD)	平年差	H20差
下 越	77	108	111	319	78	70	11.9	+0.6	+0.7	32.2	-1.5	0.0
新 潟	81	107	103	349	80	83	12.7	+0.7	+0.4	32.7	-1.1	-3.9
中 越	83	106	113	359	88	89	12.0	+0.2	+0.4	29.5	-3.8	-2.2
魚 沼	83	110	107	395	89	88	11.8	0.0	+0.2	36.5	+0.7	+1.1
上 越	85	109	108	395	89	85	12.2	+0.5	+0.8	34.3	+1.0	+0.2
佐 渡	80	108	99	405	84	81	12.2	+0.2	0.0	32.0	-2.8	-7.3
県平均	82	108	108	369	85	84	12.1	+0.3	+0.4	33.0	-1.0	-1.5

注)・平年値は平成14年から21年までの8か年平均である。

・気象感應ほの平均田植日は、新潟・佐渡地域が5月6日、下越・上越地域が5月11日頃、中越地域が5月16日、魚沼地域が5月21日である。

### 2 幼穂形成期の生育

(1) 農業普及指導センター気象感應ほにおけるコシヒカリの幼穂形成期の生育

地 域	幼穂形成期			草 丈(cm)			茎 数(本/m <sup>2</sup> )			主稈葉数(葉)			葉色(SPAD)		
	本年 (月日)	平差	H20差	本年 (%)	平比 (%)	H20比 (%)	本年 (%)	平比 (%)	H20比 (%)	本年	平差	H20差	本年	平差	H20差
下 越	7/19	0	-2	74	107	104	323	78	73	11.6	+0.4	+0.2	33.7	-0.2	+1.9
新 潟	7/15	-1	-2	76	105	100	368	81	87	12.2	+0.4	0.0	36.1	+1.5	-0.5
中 越	7/16	+1	-1	79	109	110	378	86	94	11.4	+0.1	0.0	34.0	-0.8	+1.4
魚 沼	7/18	+2	0	81	113	104	402	87	89	11.6	+0.1	0.0	37.5	+1.4	+2.1
上 越	7/15	0	-1	78	106	103	422	91	88	11.4	+0.1	0.0	37.7	+2.4	+1.2
佐 渡	7/18	0	+1	78	110	99	410	83	82	12.0	+0.2	-0.1	34.1	-1.0	-5.2
県平均	7/16	0	-1	78	108	104	384	85	87	11.7	+0.3	0.0	35.8	+0.8	+0.8

注) 幼穂形成期の-1は1日早いことを表す。

(2) 作物研究センター気象感応ほにおける幼穂形成期の生育

田植期	品 種	幼穂形成期	草 丈	茎 数	主稈葉数	葉色 (SPAD)
5月11日	こしいぶき	7月7日	68cm	487本/m <sup>2</sup>	11.5葉	41.4
	H20年比差	2日早い	119%	96%	+0.8	+4.6
	平年比差*1	1日早い	116%	97%	+0.6	+3.1
5月6日	コシヒカリ	7月12日	81cm	485本/m <sup>2</sup>	11.6葉	35.2
	H20年比差	1日早い	117%	102%	+0.2	+3.7
	平年比差*2	0日	112%	95%	+0.4	+1.1
5月11日	コシヒカリ	7月14日	83cm	430本/m <sup>2</sup>	11.5葉	35.8
	H20年比差	2日早い	111%	98%	+0.1	+5.1
	平年比差*3	3日早い	110%	92%	-0.1	+2.8

注) 平年値は、\*1は平成12~21年、\*2は平成10~21年、\*3は平成15~21年までの平均値。

【 技 術 対 策 】

7月16日発表の1か月予報では、1週目(7/17~23)を中心に気温の高い確率が高いことから、出穂期は平年に比べ早まると見込まれる。県全体では、コシヒカリの茎数が少なく褪色が進んでいることから、今後第2回目穂肥を迎える地域では穂肥を遅れずに施用し、県内全域では飽水管理を徹底して後期栄養を維持する。

1 コシヒカリの穂肥

後期栄養を確保しつつ、かつ玄米タンパク質含有率を高めないため、出穂前10日までに穂肥を施用する。

なお、穂肥施用の詳細については、地域の最新の技術情報で確認する。

2 出穂期前後～登熟期の水管理

(1) 的確なかん水の実施

ア 出穂前15日頃～出穂期や、米粒へのデンプン転流が盛んな登熟初・中期は、最も水を必要とする時期である。稲体の活力を維持して玄米品質の向上を図るために、幼穂形成期以降は田面にひび割れを起こさないよう飽水管理を行い、土壤水分を維持する。

イ 土壤水分を維持することで土壌からの窒素発現が促進されるが、土壌を乾燥させると窒素発現は減少して後期栄養の維持が困難になるため、適切にかん水する。

ウ 登熟後期まで根の活力を高く維持することで葉鞘の枯れ上がりを防止し、稈の支持力を高め倒伏軽減が図られる。早期落水は根の活力を低下させ、倒伏・品質低下を助長するので、出穂後25日までは落水せず、飽水管理を継続する。

エ フェーン現象による過高温が予報された場合は、速やかにかん水を行い、稲体からの急激な蒸散による高温障害の発生を防止する。

ただし、高温期に長期間湛水すると根腐れを助長するので、随時水を更新する。

(2) 必要時に迅速なかん水ができるよう、土地改良区等とかん水体制を確認する。また、8～9月は気温の高い確率が高いと予報されていることから、品質向上及びカドミウム吸収抑制対策の徹底に向け、全てのほ場で適正な水管理が確実に実践されるよう、農業者及び関係機関が連携して水管理状況を把握し、指導を徹底する。

(3) 8月下旬以降も残暑が厳しい場合は、胴割粒の発生防止や品質向上のため、可能な限り遅くまでかん水を継続する。

3 病虫害防除

(1) いもち病

葉いもちの7月前半の発生は、平年並の発生となっているものの、一部地域や一部ほ場では発生が多くなっている。また、7月前半の市町村調査における発生確認地点率は前年より高くなっており、一部、中～多発生ほ場も報告されている。

本年は7月17日に梅雨明けしたものの、7月15日までに感染に好適な気象条件が断続的に出現しており、特に、既に発病の見られるほ場では、7月後半に上位葉の発病や穂への感染が懸念されるため、ほ場を良く観察し、以下の防除対応を徹底する。

ア 早生品種では、発生の有無に関わらず穂いもち防除を確実に実施する。特に、わたぼうしは葉だけでなく穂も発病しやすいため、葉いもち発生状況に応じて1～2回の穂いもち防除を必ず実施する。穂いもちは予防散布を原則とし、葉いもち発生量や出穂期の気象予報から防除回数を決定する。穂いもちの防除適期は、粉・液剤を使用する場合、1回散布では出穂期、2回散布では出穂期直前と穂揃期である。出穂状況を必ず確認し、適期に防除する（「出穂期」：全茎数の40～50%が、わずかでも穂を出した日）。

イ コシヒカリBLでは、葉いもちの発生が多い場合や上位葉に発病が見られた場合は、穂いもち防除を実施する。

ウ コシヒカリBL以外の中・晩生品種は、葉いもちの発病を見つけたら直ちに葉いもち防除を行う。

エ 薬剤散布は、散布適期を逸しないよう晴れ間を見て確実に実施する。穂いもち予防剤は薬剤ごとに施用適期が異なるため、必ず適期を確認し、適期に散布する。

#### (2) 稲こうじ病

ア 多肥栽培で発生が助長されると考えられるため、穂肥施肥量は品種や生育量に応じた量とし、過剰施用を避ける。

イ 昨年度、被害粒の発生により農産物検査で規格外となったほ場や常発地では、薬剤防除を実施する。昨年度に規格外とならなくても本田発生の多かったほ場では、感染時期となる穂ばらみ期頃に降雨が多いと予想される場合には、薬剤防除を実施する。

#### (3) 墨黒穂病

ア 多肥栽培で発生が助長されると考えられるため、穂肥施肥量は品種や生育量に応じた量とし、過剰施用を避ける。

イ 昨年度、被害粒の発生により農産物検査で規格外となったほ場では、薬剤防除を実施する。

#### (4) フタオビコヤガ（イネアオムシ）

ア 6月後半および7月前半の調査では、発生量は平年比多くなっている。

イ 近年は、従来恒常的に発生している中山間地域だけでなく、平坦地域でも局地的に発生が目立つ事例が増えてきているため、今後の発生状況を把握して対応する。

#### (5) 斑点米カメムシ類

ア 7月前半調査の水田畦畔すくい取りによる確認地点率は、平年比やや少ない。しかし、雑草管理が徹底されていないほ場では、カメムシ類の生息密度が高くなっている。

イ カメムシ類の増殖を抑え、薬剤防除効果を上げるために、出穂期前までに畦畔・農道の草刈を徹底する。

ウ 出穂期までに草刈りができず、出穂期以降に行った場合は、カメムシ類を水田に追い込むことになるので、草刈り後2～3日以内に薬剤を散布する。

エ 発生予察情報に注意し、品種及びカメムシの発生種に応じた薬剤防除を適期に、確実に実施する（詳細は平成22年度農作物病害虫雑草防除指針を参照）。

##### (ア) 極早生・早生品種

斑点米が多発しやすい。特にアカヒゲホソミドリカスミカメによる被害が多いため、本種を対象とした防除薬剤の適期・適正散布を徹底する。

##### (イ) 中生品種（コシヒカリ）

主要加害種はオオトゲシラホシカメムシの場合が多いが、アカヒゲホソミドリカスミカメによっても斑点米が発生する。オオトゲシラホシカメムシに対応した防除を基本とし、アカヒゲホソミドリカスミカメの発生が多い場合は両種に効果の高い薬剤を使用し、アカヒゲホソミドリカスミカメ対象の散布時期とする。

農薬の使用に当たっては、必ず最新情報を確認する。